スマートフォンなどの使用状況等に関する調査結果（保護者）

１　調査目的

各家庭における児童生徒のスマートフォンやゲーム機等の使用状況及び保護者の意識等を把握し、インターネット・ＳＮＳに起因するトラブル等の防止に向けた対策の検討材料にする。

２　調査期間

令和６年９月 19 日(木)から 10 月 10 日(木)まで

３　調査対象

小学１年生から中学３年生までの保護者

※子どもが複数人いる場合は、１番大きい学年の子どもについての回答をお願いした。

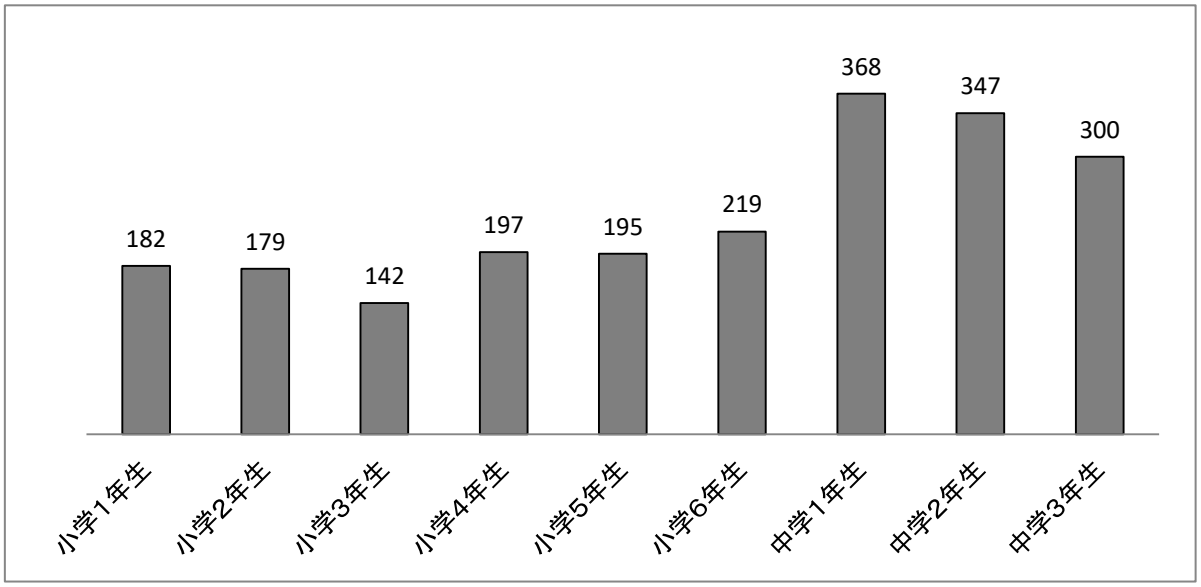
４　調査方法

Web 上のアンケートフォームから回答する。

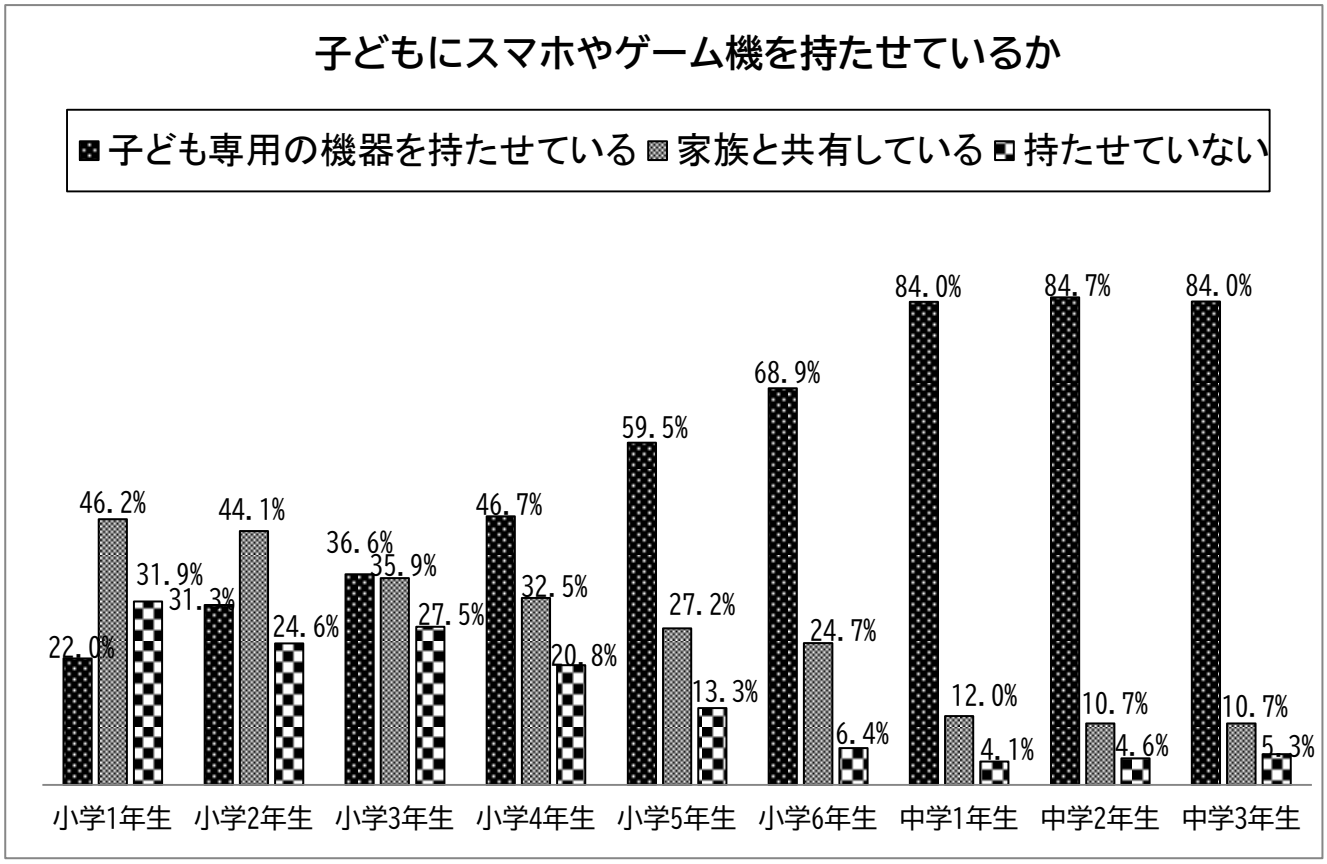
５　回答数

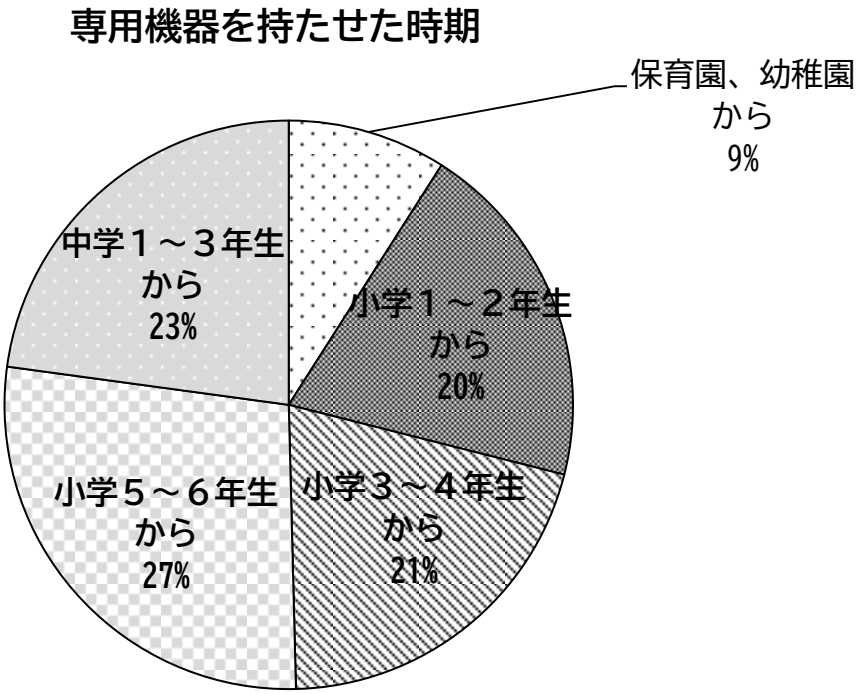
2,129 件

６　学年別回答者数



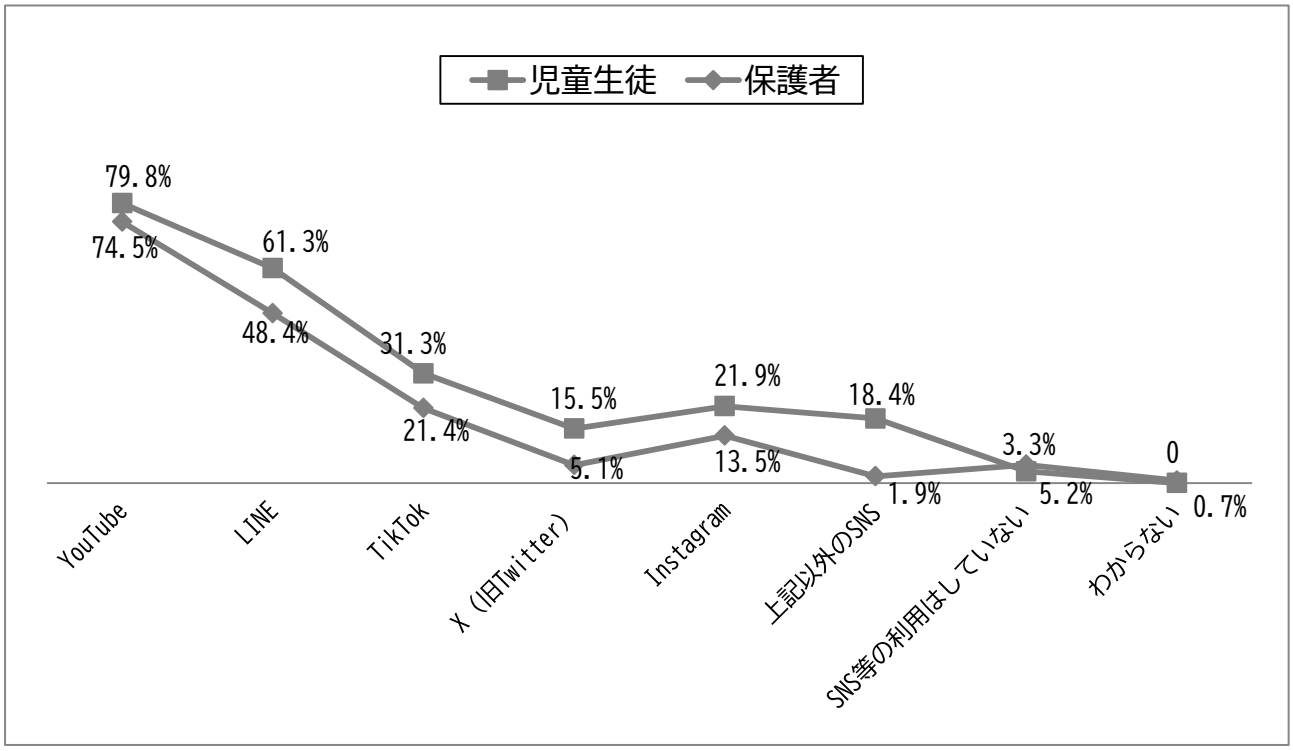
7　インターネットにつながるスマホやゲーム機等の保有状況



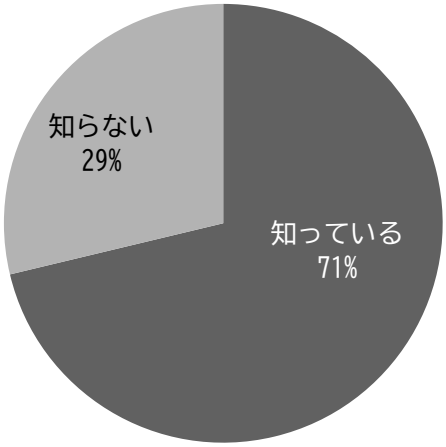


約３割が小学２年生までには専用機器を持たせており、若年化の傾向が見られる。
小学校高学年から、専用の機器を持たせている割合が高くなり、小学５年生で約６割、小学６年生で約７割、中学生はどの学年も８割が専用機器を持たせているという結果となった。

８　よく使用するＳＮＳ（複数回答可）



SNS等のアプリに年齢制限や推奨年齢があることを知っているか



知っていましたか？

年齢制限のあるアプリ

・ＬＩＮＥ（利用推奨年齢１２歳以上）
・ＹｏｕＴｕｂｅ（原則１３歳未満利用禁止。ただし、保護者が認める場合はその限りではない。）

１３歳未満は利用禁止！！
・ＴｉｋＴｏｋ
・Ｘ（旧 Ｔｗｉｔｔｅｒ）
・Ｉｎｓｔａｇｒａｍ

よく使用するＳＮＳについて、どのＳＮＳも、保護者の回答は児童生徒の回答を下回る結果となった。

特に、LINE は 12.9 ポイント、TikTok は 9.9 ポイント、Ｘは 10.4 ポイント、Instagram は 8.4 ポイント、それ以外の SNS は 16.5 ポイントの差があり、保護者は子どものＳＮＳの使用状況を十分に把握できていないことがわかる。

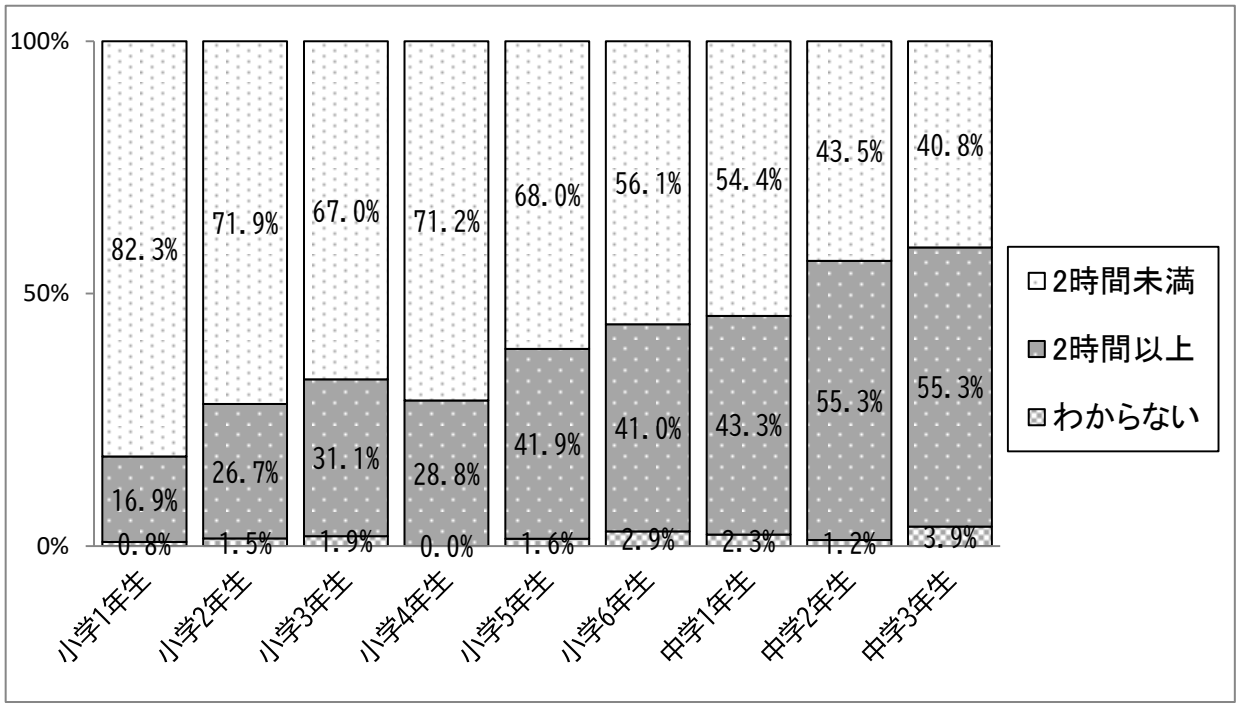
アプリの年齢制限等について、３割は知らないという結果となり、ＳＮＳのリスクなどが十分に理解されていない可能性がある。

９　利用時間

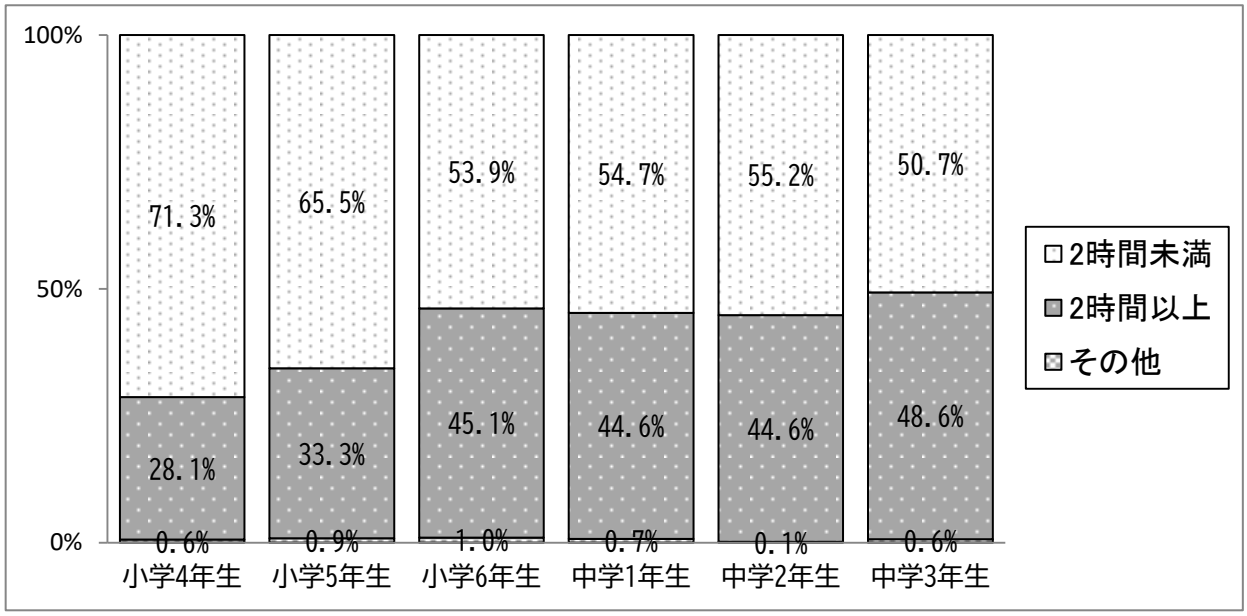
（１）　平日の利用時間

えべつスマート４ＲＵＬＥＳに合わせ、「２時間以内の利用か否か」に着目してまとめました

保護者から得た児童生徒の利用時間に対する回答



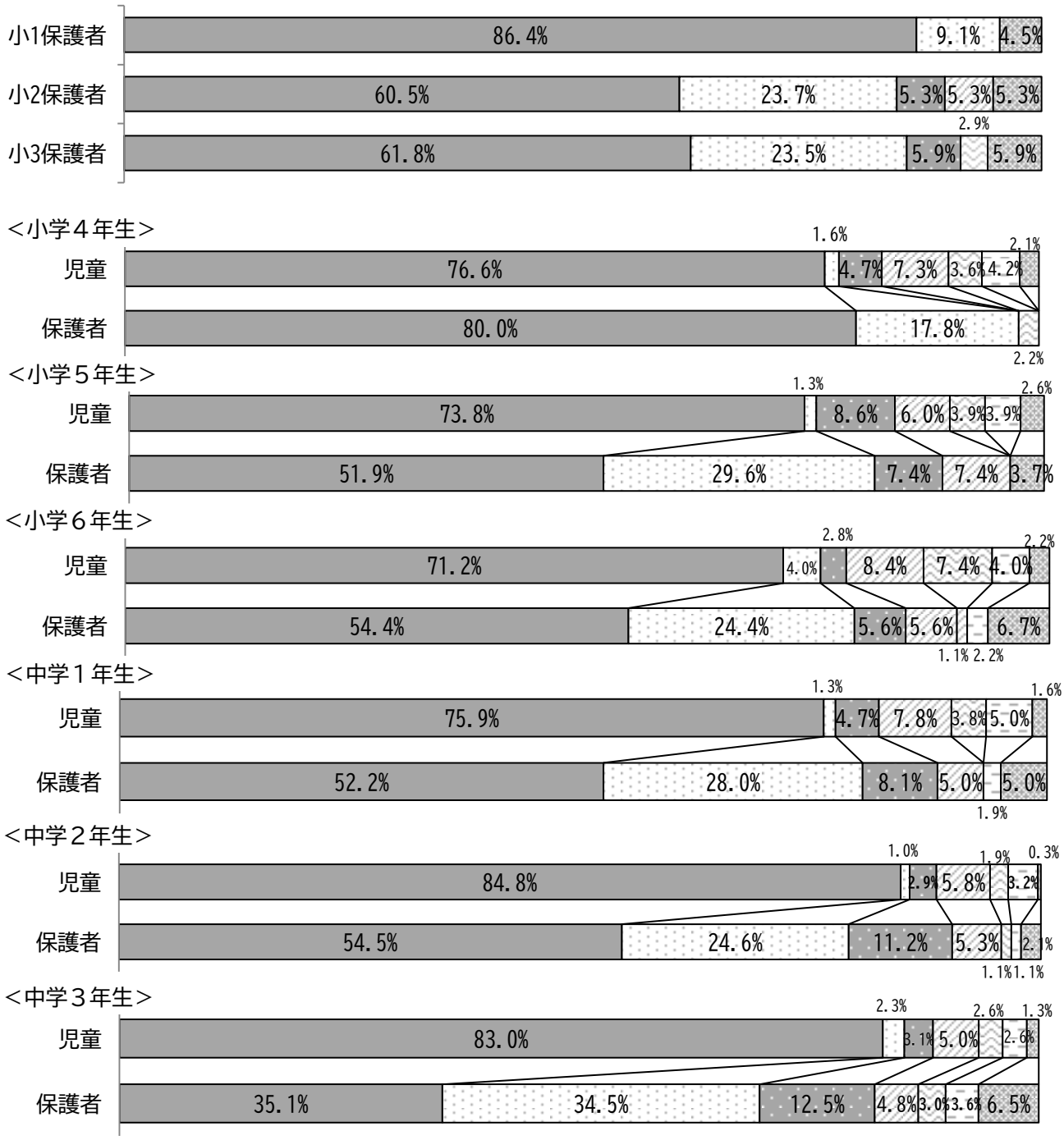
児童生徒自身の回答



保護者も児童生徒自身も、学年が上がるにつれて「２時間未満」の割合が減る傾向にあった。保護者と児童生徒自身の回答は概ね一致していたが、中学２年生と３年生については、保護者の回答と１割程度の差があり、保護者は、子どもの利用時間を、児童生徒自身よりも長い利用時間として把握していることがわかった。

児童生徒と保護者の回答比較

「２時間以上」と回答した内訳



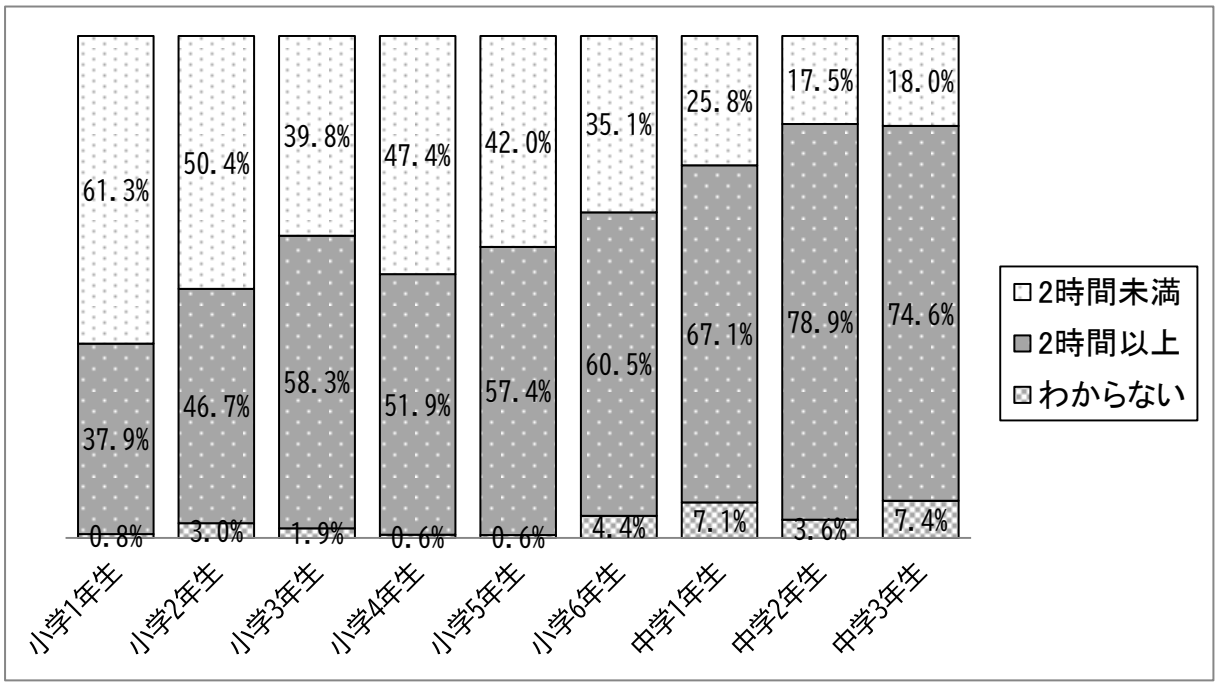
学年が上がるにつれて、児童生徒自身が自覚している利用時間より、保護者が把握している利用時間の方が長い傾向にあった。

特に、「３時間以上４時間未満」「４時間以上５時間未満」と回答した割合は、児童生徒と保護者で大きな差があった。

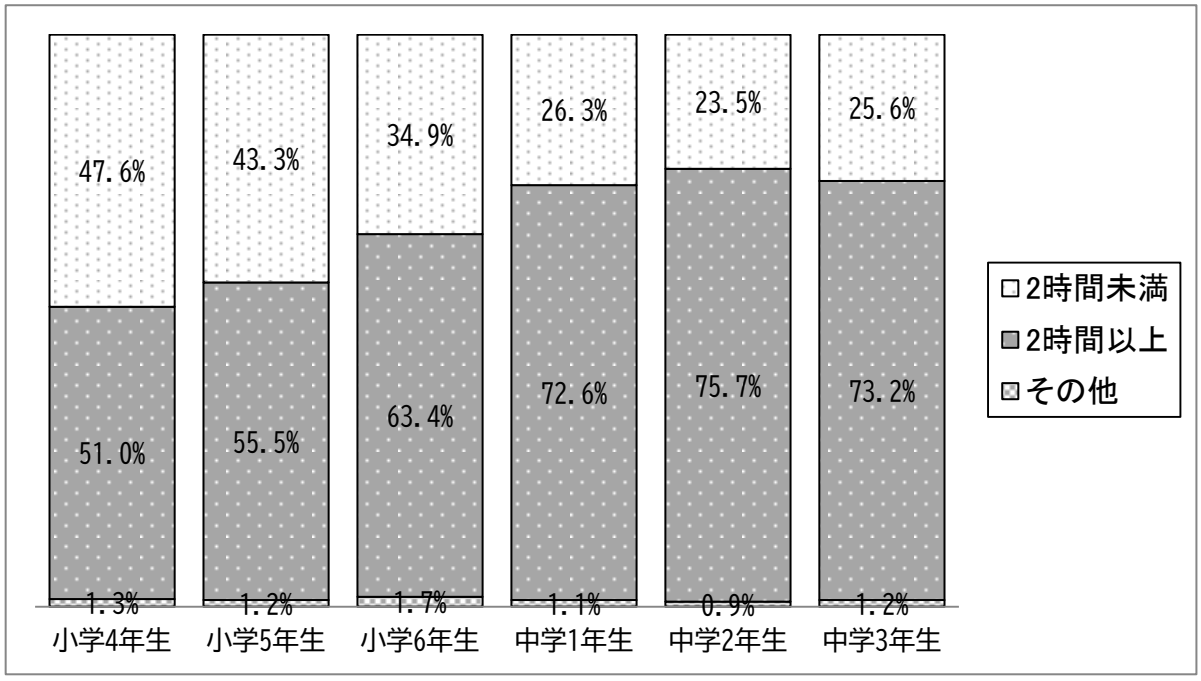
（２） 休日の利用時間

平日同様、えべつスマート４ＲＵＬＥＳに合わせ、「２時間以内の利用か否か」に着目してまとめました

保護者から得た児童生徒の利用時間に対する回答



児童生徒自身の回答

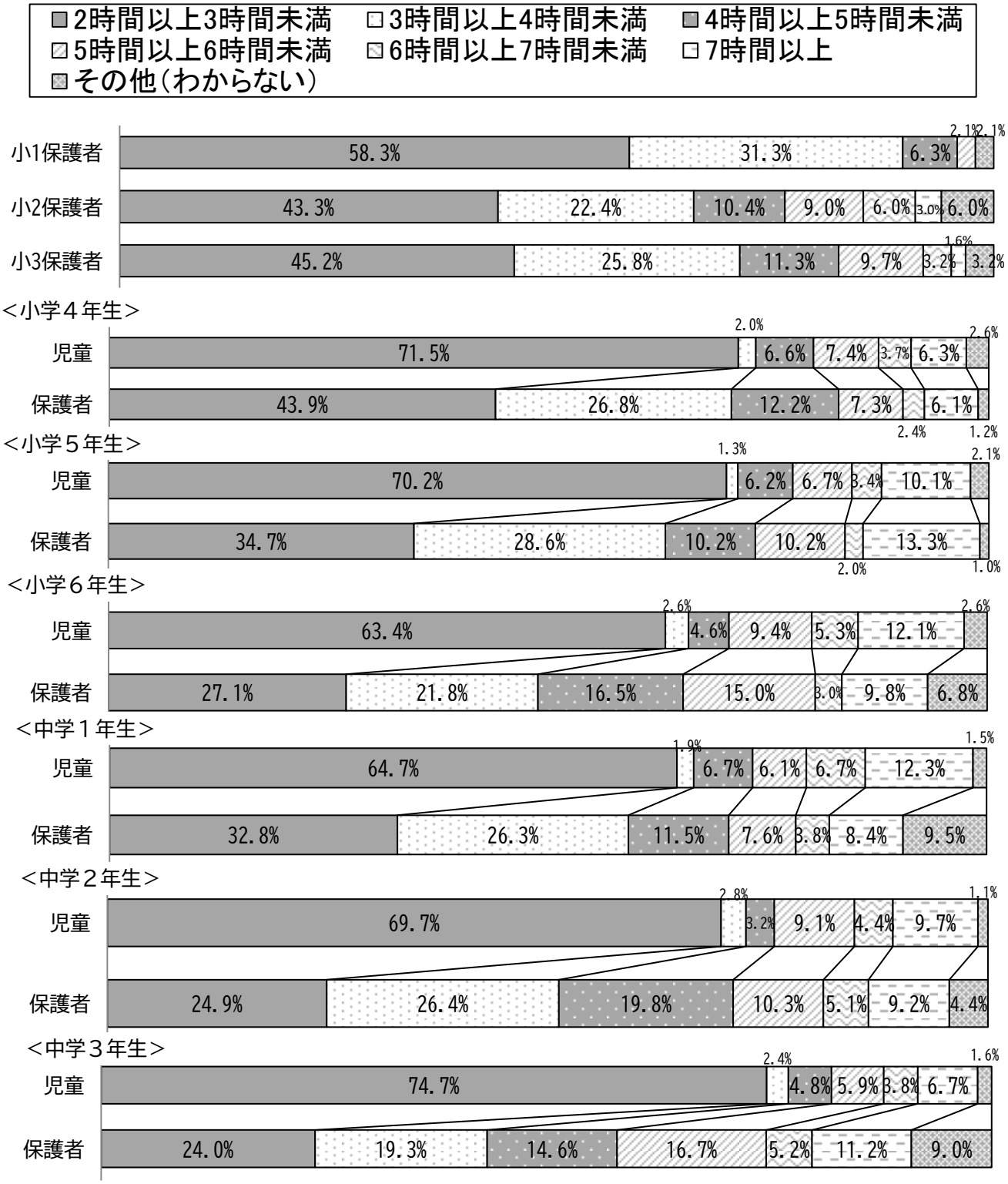


平日と比較すると、両者ともに「２時間以上」の割合が２割程度増加する傾向にあった。

平日同様、保護者も児童生徒自身も、学年が上がるにつれて「２時間未満」の割合が減る傾向にあった。平日の利用時間において、保護者の回答と１割程度の差があった中学２年生と３年生の回答は、差が縮まり１割未満の差となった。

児童生徒と保護者の回答比較

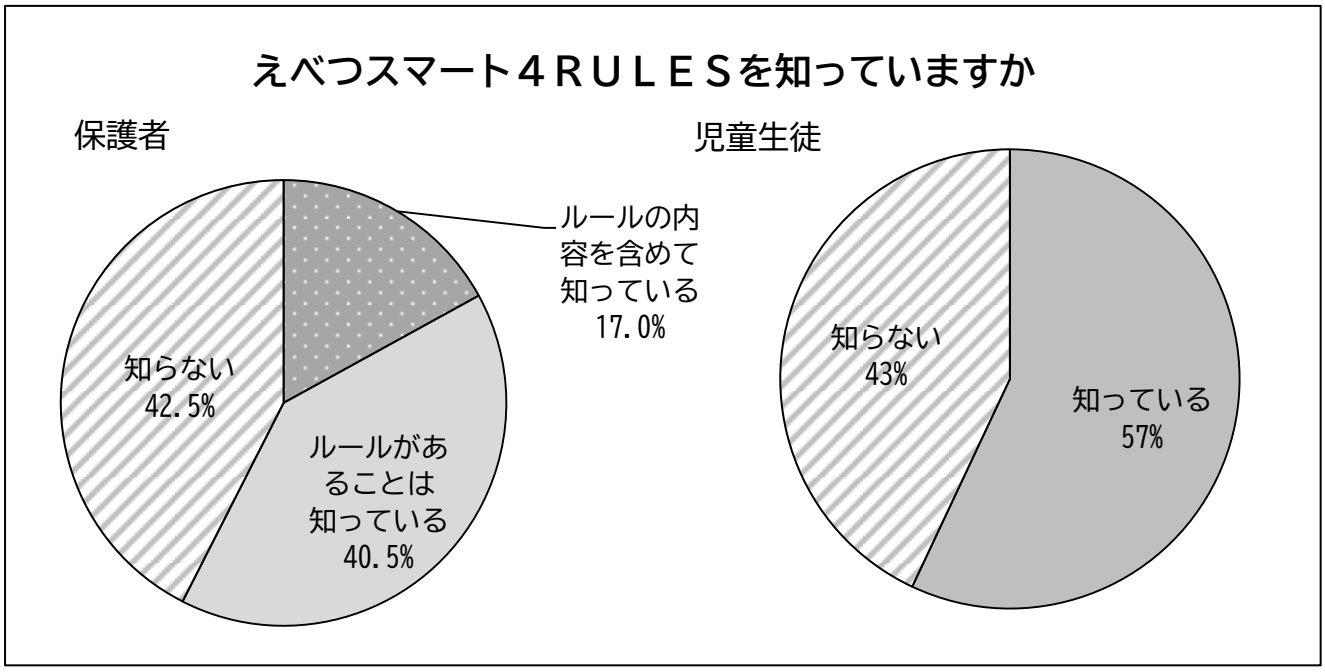
「２時間以上」と回答した内訳

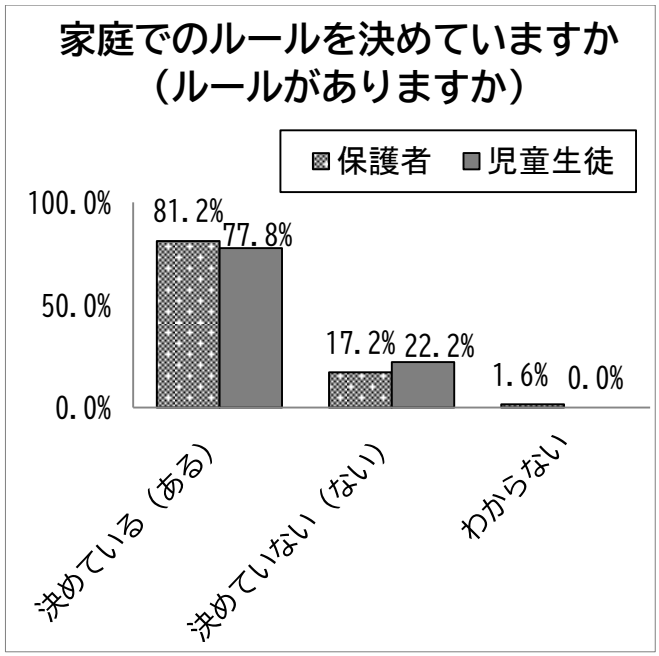


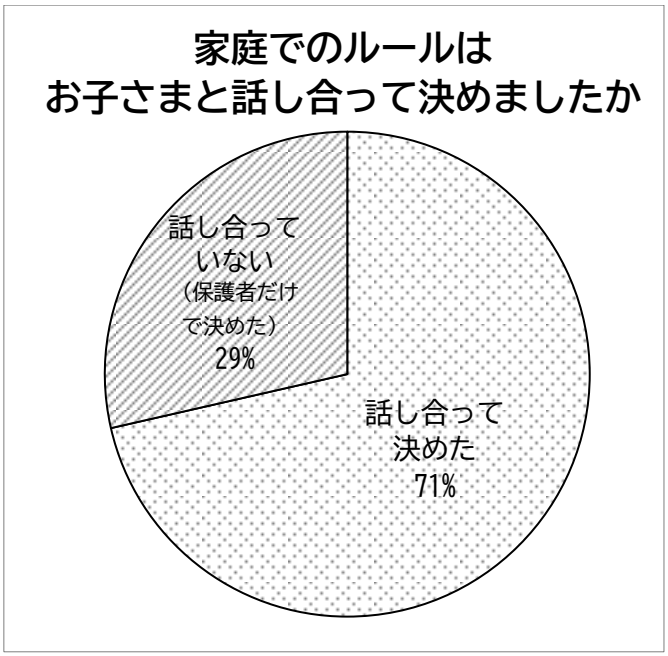
平日に比べ、どの学年も長時間利用している割合が増え、特に、平日では少なかった「６時間以上７時間未満」「７時間以上」と回答した割合の増加が顕著であった。

平日同様、学年が上がるにつれて、児童生徒自身が自覚している利用時間より、保護者が把握している利用時間の方が長い傾向にあった。

10　ルールについて





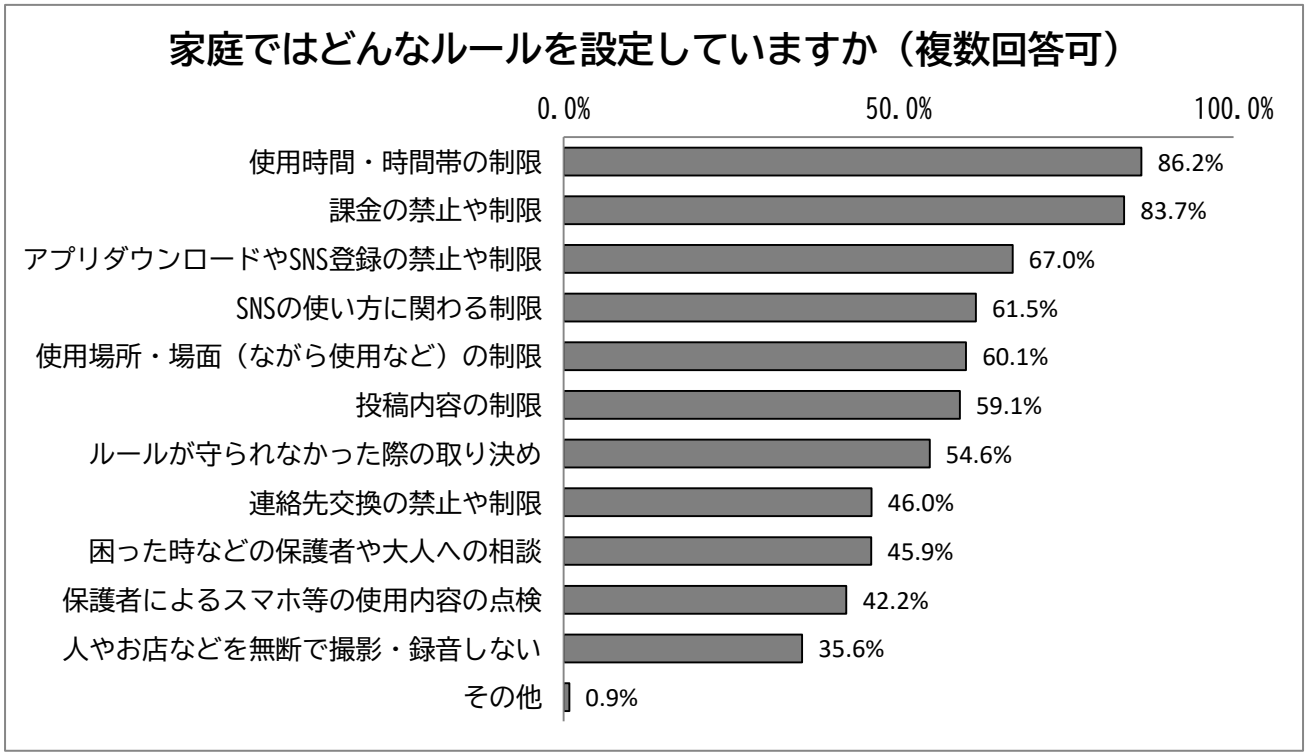


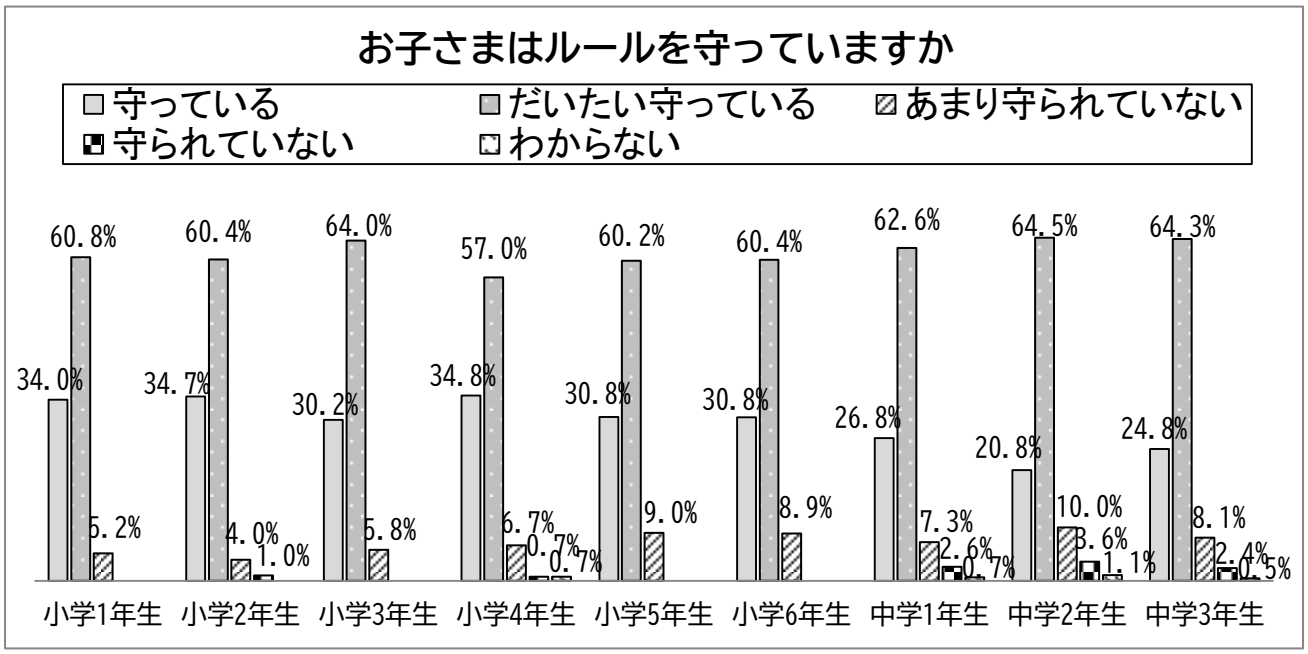
えべつスマート４ＲＵＬＥＳの認知率は、保護者・児童生徒ともに同程度で、どちらも約６割がルールを知っているという結果となった。一方、内容を含めて知っていると回答した保護者は約２割に留まった。

家庭でのルールの有無について、「決めている（ある）」と回答した保護者と児童生徒の間には 3.4 ポイント、「決めていない（ない）」と回答した保護者と児童生徒の間には、５ポイントの差があり、両者の認識に若干のずれがあることがわかる。

家庭でのルールは、約３割は保護者だけで決めており、子どもがルールの必要性や大切さを十分に理解していない可能性がある。

11　ルールの内容・順守状況



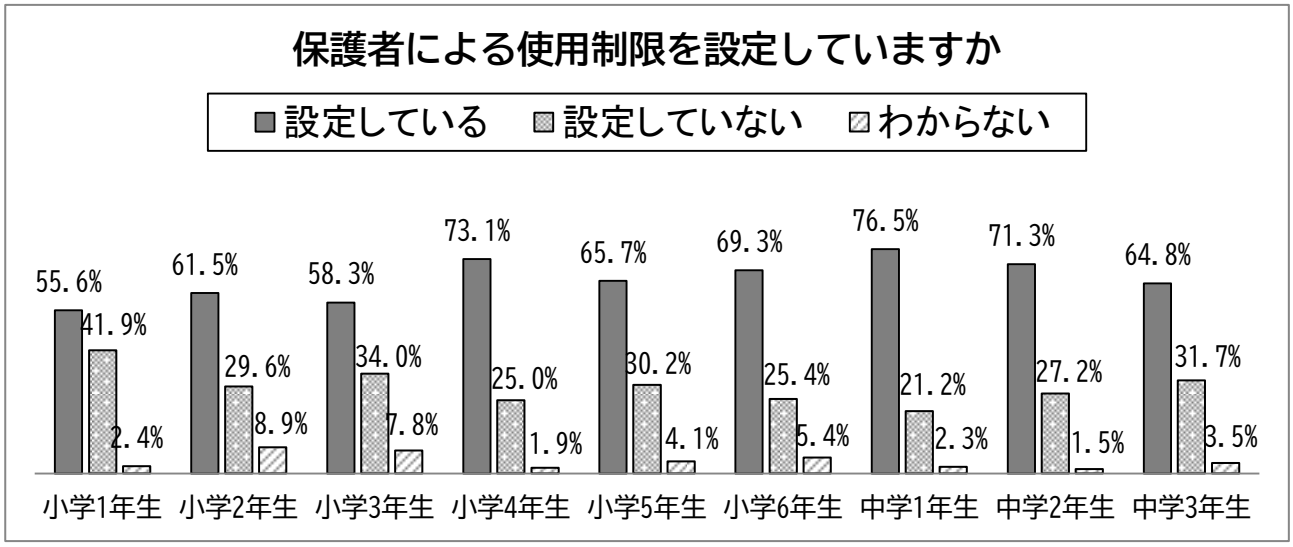


ルールの設定について、８割以上の家庭で「使用時間・時間帯の制限」と「課金の禁止」をルールに設定していた。

次いで、「アプリダウンロードや SNS 登録の禁止や制限」が約７割、「SNS の使い方に関わる制限」、「使用場所・場面（ながら使用など）の制限」、「投稿内容の制限」が約６割という結果だった。

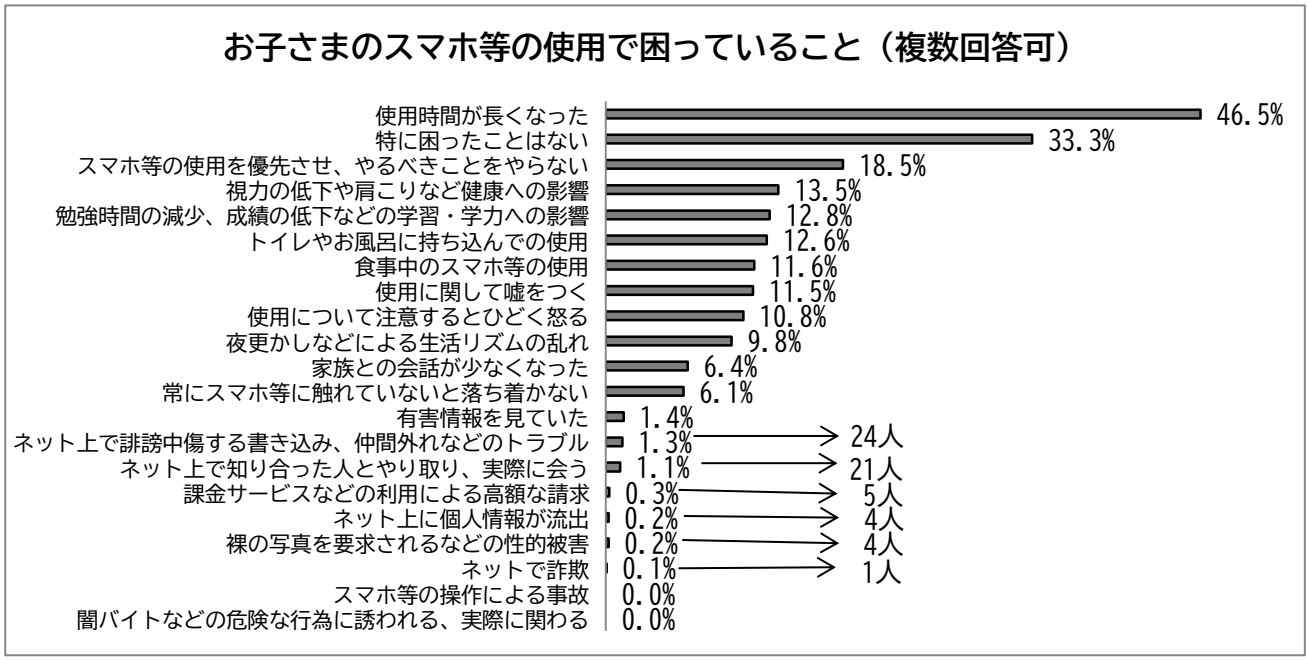
ルールの順守については、小中学生ともに、約９割が、概ね家庭のルールが守られているという結果だった。

12　使用制限



どの学年も、３割程度は使用制限を設定していないほか、「わからない」という回答も一定数あり、トラブルを未然に防ぐことが困難な割合が一定数あることがわかる。

13　困っていること

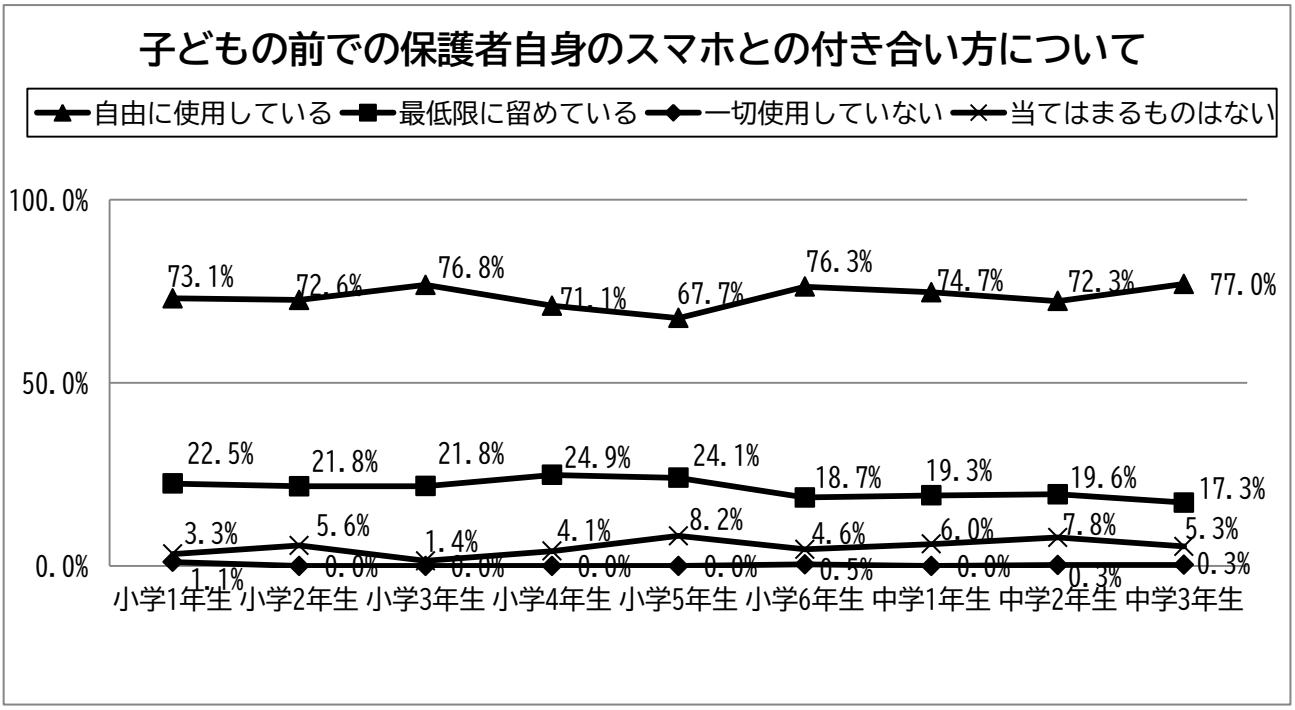


約５割が、使用時間が長くなったことに困り感を抱えていた。

３割は困ったことを経験していない結果となったが、１割は、スマホ依存の兆候と言われている、「トイレやお風呂に持ち込む」、「注意するとひどく怒る」、「嘘をつく」、「スマホの使用を優先させる」といったことに困っている結果となった。

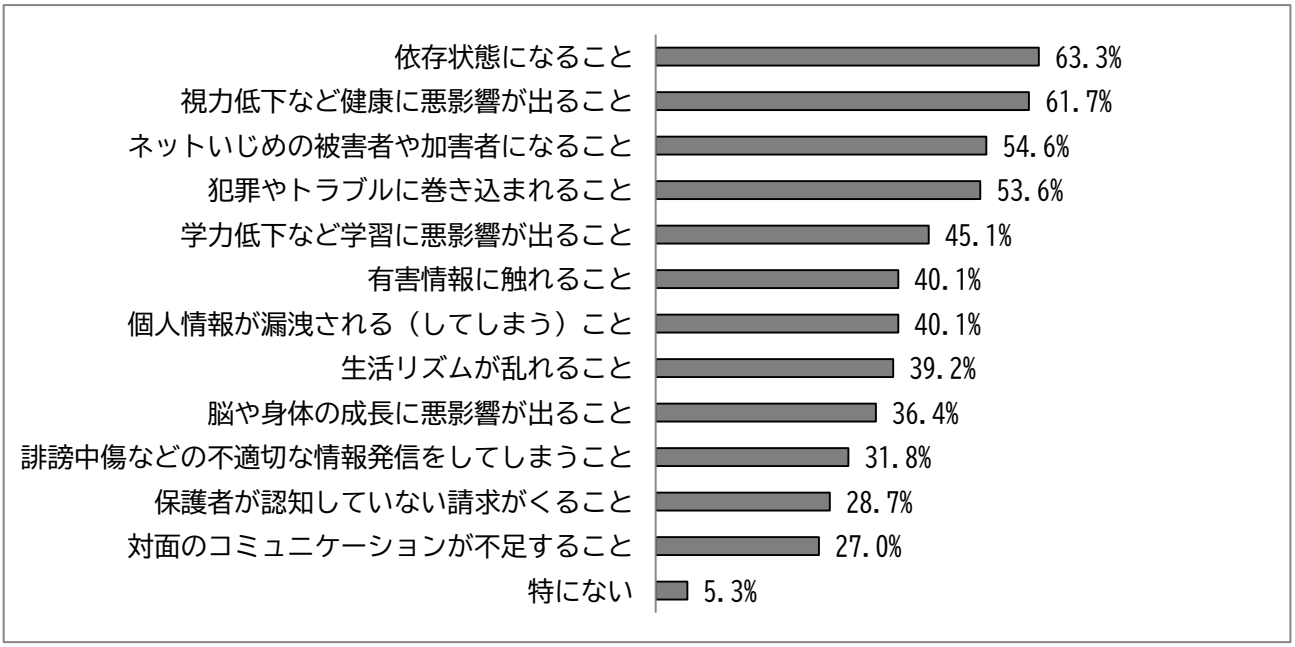
また、割合は低いが、大きなトラブルや犯罪につながりかねないケースも発生していることがわかる。

14　保護者のスマホ等との付き合い方



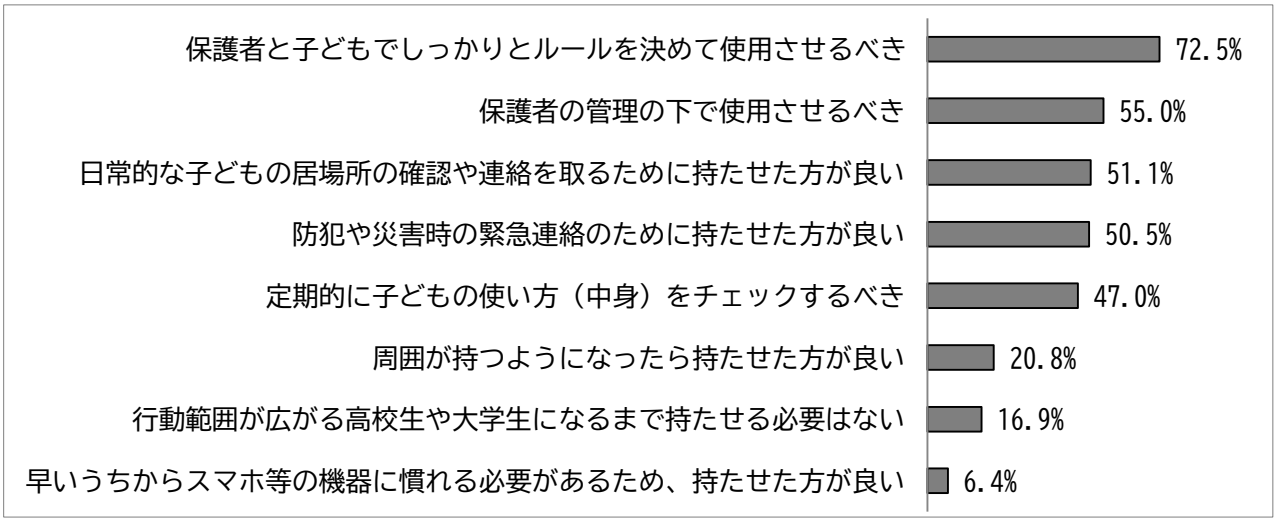
どの学年の保護者も約７割が「子どもの前でも自由に使用している」という回答であり、親のスマホの付き合い方が子どもに影響することが認識されていない可能性がある。

15　子どものスマホ等の保有・使用に関して、心配・不安に思うこと（複数回答可）



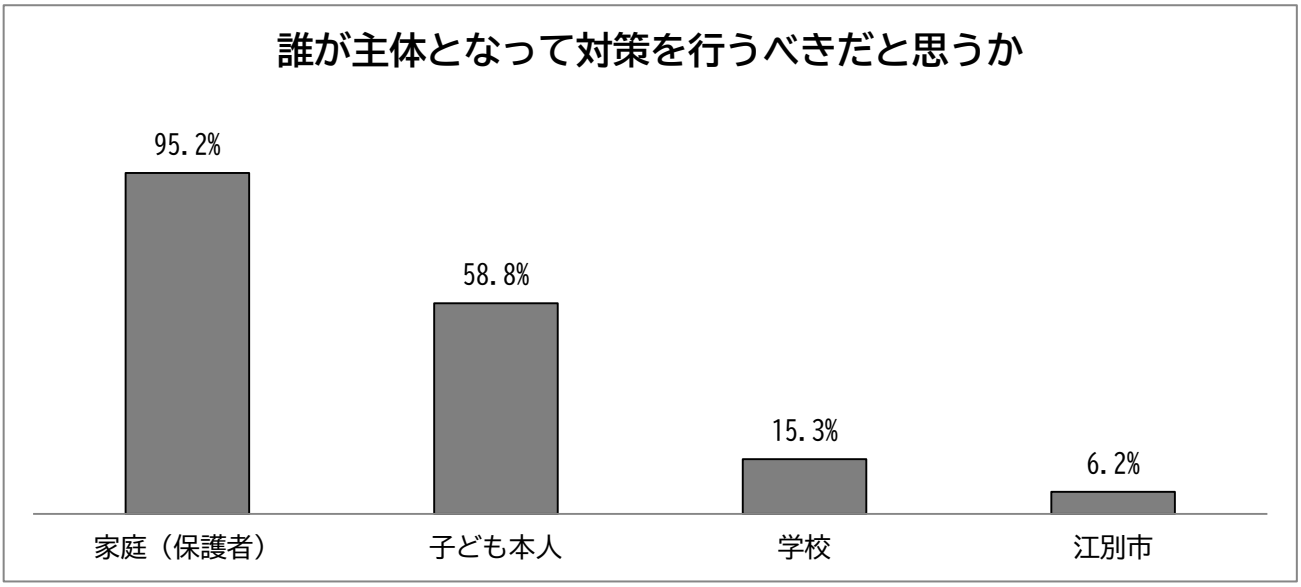
約６割が、依存や健康被害に対して心配・不安があると回答した。次いで、「犯罪やトラブルに巻き込まれること」、「ネットいじめの被害者や加害者になること」が約５割であった。どの項目も、少なくとも約３割は心配・不安があると回答されているが、少数ながら「特にない」という回答もあった。

16　保護者自身のスマホ使用に関する考え方（複数回答可）



約７割が、「保護者と子どもでしっかりとルールを決めて使用させるべき」という考えだった。次いで、「日常的な子どもの居場所の確認や連絡を取るために持たせた方が良い」、「防犯や災害時の緊急連絡のために持たせた方が良い」、「保護者の管理下で使用させるべき」、「定期的に子どもの使い方をチェックするべき」が約５割だった。

17　誰が主体となって対策を行うべきだと思うか。（複数回答可）



９割以上が「家庭（保護者）」が主体となるべきと回答しており、大半の保護者は、自分たちが主体となって対策を講ずるべきと考えていることがわかった。

次いで、「子ども本人」が約６割、「学校」が約１割、「江別市」は１割未満という結果となった。